

暮想

今、名栗の地から。

育つた旭川からは18才で出てきた。練馬、入間、名栗と移り住み、25年になる。

旭川には、石狩川、忠別川、美瑛川という3つの大きな川がある。

小学生の頃は、石狩川で泳ぎ、探検、魚取り、秘密基地づくりをして遊んだ。中学生になると、忠別川の近くに引っ越した。今はとても有名になった旭山動物園の近くまで友人と歩いていき、頭に服をくくりつけ、歩いたり、泳いだりして、豊岡の自宅近くまで来た。

昆虫採集は、小学高学年から中3までやった。日曜日は自転車に乗り、弁当持参で友人とともに朝6時から夕方まで神居古潭(カムイコタン)で虫を追いかけていた。

高校ではバスケットをしていた先輩に美術部に誘われた。バスケ部なのかと思っていたら美術部だった。当時の美術部員は身体が大きく、スポーツも得意であった。校内水泳大会では美術部が優勝した。朝から晩まで絵を描いていた。夏はスケッチ旅行。ヒッチハイクであちこち出かけた。

名栗に来て、地元の木だという西川材で、家

の裏に小屋を建て、カヌー作りをはじめた。そのうちに、村の人から声をかけられるようになり、いつの間にか小屋はたまり場となつた。野外展をやり、カヌー工房ができた。カヌー工房には捨て犬が絶えなかつた。捨てられた犬が子犬を産み、子犬もいろいろな人にもらわれていつた。もらわれない犬は工房で飼つた。シエバードのユキも捨て犬で15歳2ヶ月まで生きた。レオンベルガーのロンは捨てられ犬で、現在9才である。

名栗カヌー工房には、かの有名な四万十川のある四十市からも講演依頼があり、2回も出かけていた。また同市の職員がカヌー製作研修のため、約1ヶ月間名栗に滞在したこともあった。

「名栗村」という名前はなくなってしまったが、名栗カヌー工房から文化を発信し、名栗という地名を人々の記憶に残したい。

特定非営利活動法人「名栗カヌー工房」代表。本職は彫刻家で、TV子ども番組の美術を担当していたことも。木の魅力にひかれて名栗村に来て、本格的なカヌー作りをはじめる。目下の夢は、自作木造船による世界一周一人旅。70才までに実現させたいという。



山田直行さん

●編集後記● いいこと、あるかも
何年かぶりの「あるから」。雑誌でも休刊でもなく、ただ出せなかつただけ。思い立てふらりと取材をし、再び出してみるとことにして。というのは負け惜しみで冊子を出し続けることは大変と痛感しています。当誌は何の前振りもなく後ろ盾もなく、突如発刊させたところに面白みがあつたと考えているのですが、そのためにはわずかな“号”で動きが止まつてしまつたという側面があります。それでも、今回発行するのは、前号で『「名栗』を取り上げる』と、お知らせした意地もありました。発行にあたっては、柏木正之さんをはじめ、多くの方のお世話になりました。次号を出せるよう精進します。

スポンサー募集

「あるから」は、飯能・日高周辺の歴史・文化・生活・地場産業を超・ローカルなアプローチで紹介する冊子です。当誌に共感いただけ、資金面でご協力いただけるスポンサーを求めていきます。

- 制作(文・絵・取材)協力者または地域情報の提供者を求めています。
- ご意見・ご感想は、電話、ファックス、Eメールでお願いします。

協力：名栗温泉大松閣、小崎工業株式会社、岡部税務会計事務所、森計理事務所

発行／制作：考房あるから

企画・執筆／石井 茂
飯能市岩渕644-1 TEL&FAX.042-973-4004 mail@ishii-design.info
グラフィックデザイン／黒田 靖
飯能市川寺836-2 TEL.042-973-0272 iy9y-krd@asahi-net.or.jp
印刷協力：株式会社 文化新聞社 TEL.042-973-2525

特集

上名栗・名郷

暮・想 (くらそう)
山田直行さん

みつけた!
旧家の存在感。

地域探訪

人・暮らし 発見誌
【飯能・日高周辺】
arukara
October 2012 Vol.4

あるから



昔ながらの生活環境が新鮮。山の暮らしを堪能できる。

までに骨太。ここは西川
経済的に恵まれていたこ
ともあり、素人目にも
相当贅沢に木材を用い
ていることがわかる。風
土ともにある古民家が
醸し出すその存在感は
何とも言えない魅力が
ある。黒光りした内装
歴史を感じさせる額、
極厚の板に支えられた
神棚、伝統的な建築ら
しい開放的な間取り、
年月を経てているという
だけで味わいがあるの
だが、その場所にある
ことが相応しく、周り
の風景に溶け込んでい
るようであれば、それ

名栗すこやか村

山里をドライブしている時に、つい目に留まるのは、その土地にどっしりと構えている古民家ではないだろうか。かといって、民家であるからしてただ眺めるしかない。「名栗すこやか村」は、古民家や山の文化に関心を持った方々に活用してもらおうという施設。宿泊などの滞在はもちろん、研修や体験活動、展示・展覧会、観桜・観月などに利用できる。



林があり、畠があり、川
が流れ、井戸からはお
いしい水があふれ出す。



名栗すこやか村へのお問合せ
TEL:090-3310-5640
FAX:042-979-0625

地域探訪 みつけた！

地域探訪

山里にどつしりと佇む、
古民家。

そこにあることのせいだぐ

名栗の底力を改めて感じさせられたのは、「飯能ひな飾り展」のことだった。同イベントは市内中心部に残る店蔵や店舗などに代々伝わってきたひな飾りを展示することで飯能を活性化させようという試みであるが年々広がりを見せ、第7回目となつた今年(平成24年)は市街地だけでなく南高麗、吾野、原市場、名栗と、飯能全域が展示会場となる盛り上がりと見せていた。

思うのだが、名栗地区のそれは特に際立つてたようふに感じる。参加は数軒程度ながら、工夫を凝らした展示内容は見るものを魅了していく。なかでも人気だったのは、古民家で開催されている展示だった。どうしりと構えた旧家で見る蔵出しのひな飾りは、商店街などの展示とは違った魅力を放つていて、飯能駅方面からもっとも遠く行きづらい位置にありながら、大勢の人を集めていた。このような山あいの村で、その地で育まれた文化や暮らしぶりに出会えるのは、ぜいたくなことなのだと思う。

古民家でのおもてなし。

冊子の取材にあたり、ご案内くださったのは、名栗村最後の村長を務められた柏木正之さん。

つけた！

使ってもらうのが目的である。この特徴はロケーションのすばらしさ。古い石垣の上に建てられおり、斜面に沿って段々につくられた畠と背後に控える山林に囲まれ、段下には清流が流れている。その向こう側には隣接するキヤンプ場の雑木林も連なる。いわば典型的な里山風景をつくり上げている。

明治初期に建てられたという建物は、見事なまでに骨太。ここは西川材の产地であるわけだし、その頃、柏木家は経済的に恵まれていたこ



柏木正之さんに「名栗すこやか村」をご案内いただいた。代を重ねることで培われた情操文化の高さを感じられる。



は紛れもなく地域の財産となる。柏木さんは当家人をもてなすためにもともとあった囲炉裏を作り直した。当人いわく「食事の煮焼き、暖房、照明などの役割を持つ囲炉裏は、どの場面でも生活の中心にあつた」そうである。そういうえば、前述のイベントでもこの囲炉裏は大いに活躍していた。囲炉裏を開みながら、焼いたジャガイモや手づくりの甘酒、お汁粉などがいただけのだから、好きな人にうってはたまらない場面が用意されていた。

「飯能ひな飾り展」では、柏木家のほかにも平沼家が展示スペースを提供。平沼家は、奥様がステンドグラスの作品作りに携わっていることから、所有する古民家を地域のアートギャラリーとして、ものづくりの拠点として活用していくアイデアもお持ちのよう。築120年の古民家は、気持ちがいいほどに手入れが行き届き、黒光りする室内に、ひな飾りやステンドグラス、和紙アートなどの作品群が映えていた。



上名栗・名郷

最奥の村にある情報発信力。

特集



休日の朝、上名栗「名郷」のバス停付近はにぎやかだ。西武線の飯能駅からバスに揺られて1時間ばかりかかるところなのだが、これからワンデーハイクをしようという人が集まっているのだ。それほどの人数というわけではないが、周辺が静かなだけににぎやかに感じる。若い女性ハイカーも混じっていたりして、服装が華やかなうえ、明るい声が山にこだましている。軽く準備運動などをする姿が見られ、「さあ、これから山歩き」という高揚感が伝わってくる。

普段は、人の気配より自然の気配が濃厚な場所である。名栗川沿いの道のりをここまでたどり着くと、「山深いところまで来た」というのが多くの人の感想だろう。ただ、集落の佇まいを見まわしてみると、「昔、何事があったのではないか」と感じさせるオーラを持ち合わせている場所でもある。

ここでやる。
後戻りをできなくして。

この場所で生きていくことを決めたある若者(自身のブログではオヤジを名乗る)を訪ねた。話をお伺いしたのは、「西山荘 笑美亭」の主人、中村綱秀さん。今までこそ、ひつそりと静かな名郷地区であるが、戦後から高度経済成長期、何軒かの宿があった。中村さんのお父様も民宿の経営をなされていました。そこで、彼は二代目となる。先代がやっていた頃は企業による慰安旅行や接待旅行が盛んなご時世。宿泊客は団体さんが中心で、いわゆる宴会対応型の業務形態だったという。16年ほど前、彼はそこから大きく方向転換を試みた。その頃になると、同地において宿泊業を続けていくことを考える者はおらず、ほとんどの同業者が廃業へと向かった。そうした逆風のなか、中村さんは生まれ育った上名栗名郷の地で、再スタートを切ることを決めたのである。彼がめざしたのは、より嗜好性の高い個人向けの宿だった。そのため、先代からの得意を受け継ぐことがほとんどできぬという、施設面においてもから仕切り直した。「まわりのものからは、バカもの呼ばわりされました」と中村さん。施設関連の建築費で相当な借金を負って

の船出であつたわけだし、ここで宿泊業を続けられるか考えるものがいなかつたわけだから、無謀と考えるのは当然かもしれない。

自分が泊まりたいと思う宿をつくる。

中村さんは地元を離れ、東京の出版社で働いた時期がある。編集者として、ログハウス建築の現実から古民家再生まで、いろんなものを見聞きした。人と異なる発想と感性は、その頃に培つたものなのだろう。さて、肝心の宿の設計デザインであるが、いろいろ探ししまわった後に、飯能生まれの建築家で、地場産材を使った伝統工法を追求していた「創夢舎」吉野勲さんに依頼している。その土地の自然に溶け込もうとする設計思想に共鳴だったのである。現在、宿のホームページには「山あいの小さな木組みの宿」とあるのだが、彼が宿をスタートさせようとしていたその時代に遡ると、こうしたコンセプトの宿は、とにかく彼は信じた方向に突き進んだ。宿泊客は一日数組に限定。食事にそこだわりたいと、飯能有数の日本料理店で修業。宿のメンテナンスや庭の手入れなどは、できるところは自分でやった。「高級ではないが本物を提



名郷からは、入間川源流に至る道がある。植林地帯を抜けると、ブナやナラなどの原生林が広がる水源付近へ。原生林の急坂をさらに登っていくと、昔、



沼があったとされる「ウノタワ」に出る。急に出現する草原のような空間に、不思議な感覚におそれわれる。「ウノタワ」の名の由来になっている水源にまつわる伝説があつたりする場所で、山深さを堪能できるポイントとして、人気が高い。名栗で最も大きいブナの巨樹も、ここにある。

中村さんは山岳ガイドでもあり、飯能エコツーリズムでは評判の宿に。



山が見渡せる宿のダイニング。
上級な山小屋に来たような感じがする。

供したい」という思いから、何でも自分でやつてしまふのがスタイルだった。集客はホームページをフルに活用。その甲斐があつて、名栗の山奥にある軒宿は、來てくれたお客様が次のお客様を呼び込む形で、じわりと固定客を増やしていくた。



この辺りが賑わっていたことを想像すると、ロマンを感じてしまう。



「名郷木材」工場跡が会場となった。

山懷に抱かれたこの場所で、おいしいものが食べられれば、それで満足。

いから。なかで名郷地区は、周辺地域にあって中性的な役割を担っていたようないいと、秩父や吾野はそれほど遠いわけではない。例えは、白岩における石灰採掘や林業が盛んだった時期には、この場所は相當にぎわいを見せていたようだ、「名郷銀座」と呼ばれる通りが存在した。

最奥の村には、「銀座」が存在していた。

さて、特集記事のタイトルで、名郷のことを「最奥の村」と記してしまった。しかし、歴史を遡ってみると、そうとばかりも言えない。明治町村制施行から大正時代にかけて、下名栗村・上名栗村は秩父郡に属されており、そのなかで名郷地区は、周辺地域にあって中性的な役割を担っていたようないいと、秩父や吾野はそれほど遠いわけではない。例えは、白岩における石灰採掘や林業が盛んだった時期には、この辺りが賑わっていたことを想像すると、ロマンを感じてしまう。

以下は名栗村史からの引用。

「…名郷銀座と呼ばれる界隈には、パチンコ屋が二軒、コップ酒の出る飲み屋が三軒位あつた。…ここには名郷木材の職工や近辺の石灰の採掘に関わる人なども集まつてきてにぎやかだつた。…白岩では、戦後も昭和三十年代まで、炭を焼いていた。…」

心なごむイベントに出会った。

このように、現在からすると想像がつかないような繁盛ぶりであり、周辺地域の人々を引き付けていたようである。

COFFEE紗藏



この界隈を再び盛り上げようとするイベントがあるというので、出向いてみた。ネーミングは「名郷味市(なごみ

い)」。この名の通り、ジャガイモや山野草などの特産物を楽しんでもらおうというのが趣旨で、雨模様であったにも関わらず、ますますの盛況ぶりであった。

山里にある 女の子の隠れ家。

名

郷のバス停から歩いて数分。前述の「笑美亭」に行く途中にある。オーナーは、飯能のまちなかに住んでいる加藤由起子さん。実家にあった古い蔵を改装してオープンさせた。彼女は「田舎にある素敵な店を食べ歩くのが好きだったんだ」といい、地元の大工さんに頼んで、さっさとこのカッフを開設した。山深い里にありながら、コーヒーもスイーツもしっかりと楽しめる、名郷に、また楽しみなスポットができた。

この場所で何を実践し、何を発信するか。

「福王院正覚寺」は、創設後500年以上という禅寺である。それだけ古いお寺であるから檀家も多く、上名栗円に及ぶ。同寺院は、歴史上にも登場している。「武州世直し一揆」と呼ばれる出来事で、江戸末期、武藏の国全域で民衆による打ち壊しが発生。その発端となつたのが、ここに檀家だった。現住職は、石井早苗(そうみよしさん)。その長い歴史とともに、同寺院を有名にしているのが石井住職がはじめたという宿泊坐禅である。坐禅は自らの日課であるわけだが、それを誰でも体験できるようにするのを思



テレビ局や新聞社の取材が多数あった。こだわり過ぎない、自由な発想が身上。



食事をする。風呂に入る。床に就く。掃除をする。ごく日常的なことが、新鮮に映る。



い付いた。
お寺というものは、人々が安心して暮らしを全うできるよう、何があつても変わらずにその地域にあり続けることが第一義である。お寺を継ぐといふことは、相当の覚悟がいるものだと言える。そのうえで、精神的な不安定感が増す世の中にあって、プラスの役割が果たせないと考えた。坐禅を受け入れるだけでなく、宿坊としての機能を持たせることで、腰を落ち着けて滞在できるようにもした。

実際それをはじめてみると反響が大きくなり、自らを見つめ直すと、都会で忙しく働くビジネスマンやしつけに問題を抱える親子などが訪れた。泊まりながら坐禅できる寺は稀なようで、そこにあるものを活かすのが、

マスコミが頻繁に取り上げてくれるようになつた。住職夫人の千寿子さんがつくる精進料理(ここでは典座料理という)も評判を呼んだ。せつからお寺らしいおもてなしをしたいし、食事の作法からも何かを学んで帰つてほしいと考えた。旬の素材、地場の素材を活かしてつくる手料理は、しみじみと心と身体にしみわたる。

マスコミが頻繁に取り上げてくれるようになつた。

窓辺で行う坐禅や住職の法話、写経などの感想に加え、環境のすばらしさに感動して帰る方が目に付く。静か過ぎるほどの場所であるから、聞けるのだからお寺らしいおもてなしをしたいし、食事の作法からも何かを学んで帰つてほしいと考えた。旬の素材、地場の素材を活かしてつくる手料理は、しみじみと心と身体にしみわたる。

マスコミが頻繁に取り上げてくれるようになつた。

窓辺で行う坐禅や住職の法話、写経などの感想に加え、環境のすばらしさに感動して帰る方が目に付く。静か過ぎるほどの場所であるから、聞けるのだからお寺らしいおもてなしをしたいし、食事の作法からも何かを学んで帰つてほしいと考えた。旬の素材、地場の素材を活かしてつくる手料理は、しみじみと心と身体にしみわたる。

マスコミが頻繁に取り上げてくれるようになつた。

窓辺で行う坐禅や住職の法話、写経などの感想に加え、環境のすばらしさに感動して帰る方が目に付く。静か過ぎるほどの場所であるから、聞けるのだからお寺らしいおもてなしをしたいし、食事の作法からも何かを学んで帰つてほしいと考えた。旬の素材、地場の素材を活かしてつくる手料理は、しみじみと心と身体にしみわたる。